

大阪は‘まち’がほんまにおもしろい **豪傑・岩見重太郎伝説と一夜官女ものがたり**
～淀川とともに生きたまち・野里～



かつて野里村は「泣き村」と呼ばれるほど風水害や疫病に見舞われ、「村を救うには乙女を神に捧げよ」という神託に従って、乙女の人身御供を行っていました。しかし、その話を聞いた1人の武士が「神は人を救うが人を犠牲に求めることはない！」と怒りに立ち上がって……直木三十五や司馬遼太郎の小説にもなった豪傑・岩見重太郎の伝説。その舞台を歩きます！

⑩池永家住宅
江戸時代の都市近郊農家で、歴史的景観に寄与しているものとして、国指定登録文化財になっています。主屋は18世紀中期頃に建てられ、文化年間(1804～1817)の増改築を経て、明治中期に現在の形となりました。柱や土間の梁組など古民家の要素をよく残っていて、かつての野里村の農村景観を彷彿とさせます。

⑨野里の渡し跡・櫛の橋跡
新淀川改修以前の中津川はこの付近流れ、「野里の渡し」が置かれていました。「摂陽郡談」(元禄14年・1701年刊行)には「野里済(わたり)」とあり、尼崎方面への街道の一部になっていました。その後、明治9年(1876)に「櫛(かしわ)の橋」という有料の木橋が架けられ、この橋は中津川が埋め立てられる明治39年(1906)頃までありました。

⑧一夜官女祭
野里住吉神社の神事(府の無形文化財)です。かつて野里村は「泣き村」と呼ばれるほど、風水害や疫病に見舞われた時代がありました。悩み苦しんだ村人たちは「村を救うために乙女を神に捧げよ」という神託を聞き、旧暦1月20日に白矢の打ち込まれた家の娘を唐櫃に入れ、人身御供として捧げることにしました。7年後、村を通りかかった1人の武士がこの話を聞いて「神は人を救うが人を犠牲に求めることはない」と述べ、乙女の身代わりに唐櫃の中へ。翌朝、村人が様子を伺うと武士の姿はなく、唐櫃から血の跡が点々と残っていて、それを辿ると大蛇(佛々という説もあります)が絶命していました。講談などでは、この武士は武者修行中の岩見重太郎とされ、のちに直木三十五や司馬遼太郎が小説化しています。現在の一夜官女祭は2月20日に執り行われ、氏子より選ばれた7人の少女が美しく飾られた御供物の桶7台とともに神前に進み献じます。祭具の中には元禄15年(1702)の墨書のものがあり、300年以上前からあることは確認できています。また毎年、乙女が運ばれた場所は社殿裏の龍の池で、その池は現在は埋まり、跡地に乙女塚が建てられ、往時を偲んでいます。

⑦野里住吉神社
社伝によれば、永徳2年(1382)、足利義満の創建といわれます。野里は、明治末期の新淀川開削までは、旧中津川の右岸に沿って開かれた村落でした。現在の野里住吉神社の東側の石垣は、その当時の中津川の堤防の名残をとどめています。毎年7月31日と8月1日の2日間に渡って、夏祭が執り行われ、北之町の枕太鼓、中之町、東之町、西之町の3台のだんじりが町中を行き交います。とくに8月1日夜の宮入は、だんじり、枕太鼓が一同に集まり、その大迫力を見物です。

⑥新淀川
有史以来、淀川は、しばしば大洪水を起こしてきました。なかでも明治18年(1868)6月18日の大洪水は有名で、大雨で枚方付近で200メートルほど堤防が決壊して、大阪市が水浸しの大災害を被りました。そこで淀川支流の中津川を拡張して新淀川を作り、大阪湾に水を流すという遠大な改修計画をオランダ土木技師デ・レーケが立案。予算がないので、なかなか着工されませんでしたが、日清戦争後の明治29年(1896)、公共河川法案が帝国議会で可決され、ついに改修工事が開始されました。デ・レーケの設計案をもとに大阪築港計画も併せて進められ、沖野忠雄博士による技術的修正を加えて工事は進み、毛馬の閘門が完成。淀川から大川への流量が調節され、明治42年(1909)、ついに新淀川が誕生しました。この工事で、新流路にあたる町村は水没し、3000名を超える人々が立ち退きを余儀なくされたと言われています。



一夜官女祭
毎年2月20日に行われています。大阪府指定文化財に指定されており、人身御供の作法が神事に伝わったものと言われています。



岩見重太郎 大蛇退治伝説



野里商店街



⑩池永家住宅



島村蟹(モクズガニ)
昔、中津川でよく獲れたので野里の名産物だったそうです。



野里のだんじり
住吉神社には立派なだんじりが3台保管されています。



野里の渡し船
中津川の右岸と左岸を渡し船で移動していました。



③くろがねもちの木



神功皇后 柏の葉と餅

JR 塚本駅

①鼻川神社御旅所
鼻川神社の御旅所です。御旅所の東側の曲がりくねった街道が、昔の中津川左岸の名残りであるといわれています。「摂津名所図会大成」によれば、「中津川の下流 野里村にあり この街道は大坂より尼がさきにいたる近道なるがゆへに 西国往返の旅人兵庫西の宮尼が崎等の諸商人ことごとくこの渡しを越ゆるにより常に行人間断なく 別けて尼がさきの魚商人飛脚をはじめ西宮兵庫の飛脚諸商人日毎に通行して頗る賑わしき道条なり」とあります。

②島村蟹
戦国時代の享禄4年(1531)6月、尼崎から大坂にかけて細川晴元・三好元長連合軍と細川高国とのあいだで「大物崩れ」と呼ばれる合戦が行われ、とくに最大の激戦地となったのが野里川(中津川)で、5千人とも1万人ともいわれる犠牲者を出しました。そのさいに細川高国の臣・島村貴則の奮戦が凄まじく、最後は敵兵ふたりをかえ海中に身を投じたといわれます。その後、野里川には人面蟹が発生して、これは島村貴則の恨みのこもった島村蟹だ、という伝説を産み出しました。

③中津川堤防跡とクロガネモチ
当地は明治29年～43年(1896～1910)の淀川改修工事による埋め立てられた中津川左岸堤防の位置に当たります。堤防に自生したクロガネモチがいまも残っていて、平成15年(2003)、「緑の遺産」として大阪市保存樹に指定されました。

④鼻川神社
社伝によれば、神功皇后が鹿島に御幸のさいに当地に立ち寄り、付近の住民たちが柏の葉に載せた餅を献上。神功皇后は、当地が無名であると聞いて、川の対岸に突出した「鼻」のような地形であったので地名を「はなかわ」、渡しを「かしわ」と命名しました。その後、神功皇后を祀り、後に住民と関係の深い海老江の氏神、須佐之男命を併せて祀るようになったのが神社の縁起といえます。

⑤西成大橋親柱の碑
鼻川神社境内にあります。明治42年(1909)に新淀川開削が完成しましたが、そのさいに架けられたのが西成大橋です。現・淀川大橋の付近にあって、梅田街道(大和田街道)に通じ、梅田方面から西淀川区へ入る玄関口でもありました。親柱の碑文には「明治41年12月竣工」「延長四百四間参分(約735メートル)」「高欄内法参間(幅約5.5メートル)」と記されています。